

田原市図書館ふしぎ文学半島プロジェクト2015
“ふしぎ文学の達人”が選んだ 「戦争とふしぎ」オススメ本

選者：東雅夫氏（アンソロジスト・文芸評論家）

選者コメント

1. 『外科室・海城発電』泉鏡花 岩波文庫 1991

◆「琵琶伝」「海城発電」など、反戦・厭戦的作品が多く含まれる、鏡花アンソロジーとしては異色の一巻（編纂は川村二郎）。とりわけ、日清戦争の勝利に沸く祝賀の群衆が、狂乱の果て、いつしかグロテスクな巨大妖怪へと変容してゆき、哀れな婦人を巻き込んで死に至らしめる顛末を活写した「凱旋祭」の異様さは比類がない。

2. 『日本怪奇小説傑作集2』紀田順一郎・東雅夫編 創元推理文庫 2005

◆日中戦争従軍中に芥川賞を受賞したことで知られる戦争文学の大家・火野葦平の「怪談宋公館」は、大陸での従軍体験にもとづくエキゾチックな幽霊屋敷小説の逸品。占領下の異様な雰囲気と、邸内で頻発する怪異の相乗効果に注目したい。一方、三橋一夫の小品「夢」は、哀切きわまる従軍兵士の夢を綴って、声低な反戦の調べを奏で、印象深い。ほかに、戦犯問題の暗い影に怯える一家の閉塞的恐怖に満ちた三島由紀夫「復讐」なども。

3. 『女霊は誘う』（文豪怪談傑作選・昭和篇）東雅夫編 ちくま文庫 2011

◆私自身が手がけたアンソロジーの中でも、ひときわ戦争の惨禍が色濃く投影された一巻を紹介しておこう。兵營の息子に面会するため見知らぬ街で行き暮れた婦人が体験する幻めく一夜の不思議を描く豊島与志雄「沼のほとり」、戦死した画家の記憶が盆の宵間に妖しく明滅する久生十蘭「生霊」、同じく十蘭の「黄泉から」は、激戦地ニューギニアに散った従軍看護婦の魂が、恋い慕う男のもとへ戦後ひそやかに帰還する不思議を描いて至高の輝きを放つ。そして広島における原爆の惨禍を、響き交わす死者たちの声に凝縮させた原民喜の絶唱「鎮魂歌」……戦後七十年を迎えた今こそ、紙背に徹してお読みいただきたい不朽不滅の作品群である。

4. 『七つ橋を渡って 琉球怪談』小原猛 ボーダーインク 2012（※）

◆現代沖縄の怪談実話を、腰を据えて蒐集・筆録してきた著者による独り百物語形式の怪談実話集、第二弾。最終章にあたる「七つ目の橋 沖縄戦の怪異」には、我が国で唯一、壮絶な地上戦の舞台となった地・沖縄に今も息づく戦争由来の怪異を、まことに生々しい筆致で伝えて圧巻である。

5. 『あやし うらめし あな かなし』 浅田次郎 集英社文庫 2013

◆当代きってのジェントル・ゴースト・ストーリーの名手による短篇集。旧軍隊の惜別歌をタイトルに冠した「遠別離」は、過去と現在の六本木を二重写しに展開される慰霊と鎮魂の物語。作者の言葉を引こう——「今は東京ミッドタウンになってる、あそこの門から出て行った兵隊さんたち、それもさほど昔の話ではない、僕等が生まれるほんの何年か前に、あそこから出て行った何万の兵隊さんは、どこかに連れて行かれて、どこかで死んだんですよ、ほとんど還って来なかった。／だから僕は、あそこが再開されると知ったときにね、防衛庁のときまで使われていた一聯隊の兵舎も全部なくなって、とうとう歴史に埋もれてしまうんだな、と思って、取材に行っただけです。そういう意味でこれは、僕なりのレクイエムですな」

東さんより

近代以降の日本における「戦争」と「ふしぎ」をめぐる物語に絞って、5冊を挙げてみた。

このほか、松谷みよ子〈現代民話考〉(立風書房/ちくま文庫)の第2巻『軍隊 徴兵検査・新兵のころ』と第6巻『銃後 思想弾圧・空襲・原爆・沖縄戦・引揚げ』や、谷口基『怪談異譚 怨念の近代』(水声社)、山田盟子『戦争と怪談』(新風舎)あたりも、このテーマを考えるうえで必読の基本図書だろう。

選者：島田尚幸氏 (あいち妖怪保存会代表)

6. 『戦争と読書 水木しげる出征前手記』 水木しげる・荒俣宏 角川新書 2015

◆日本妖怪界の巨人・水木しげる。万事を超越し飄々として見える彼も、死の影に怯え、悩み、苦しんだ時代があった。この本では一青年武良茂が徴兵検査を受け、出征を前に感じた思いを書き綴った生々しい現実——「死」を無理矢理にでも受け止めざるを得ない時代を生きた、ひとりの人間の記録である。是非とも、本書を読んだ上、改めて「水木作品」を読み直してもらいたい。



リストの6冊(シリーズ含む)は、田原市図書館で貸出・予約可能な資料です。ただし、※の資料は、2015年10月末現在、未所蔵のため、ご覧になりたい方はリクエストサービスをご利用ください。

2015.10 作成